

批評と紹介

A.N.コノノフ総編輯, S.G.クリャシュートルヌイ責任編輯,
И.Г.ドブロドモフ, È.R.テュニシェフ監修, D.D.ワシリエフ著

イエニセイ川流域テュルク-ルーン文字記念物集成

護 雅 夫

冒頭に掲げられた、監修者の辞によれば、「本書——個々の地域の古代テュルク民族のテキストを、はじめて、しかも、完全なかたちで公けにしたもの——は、批判的に整理された、イエニセイ川流域のテュルク-ルーン文字銘文の集成(略号:KER)である」。

本書は、つぎのような構成をもつ。

- I. 序文 (str. 3~8.)。
- II. インデクス (indeks. str.9, 11~13.)。
- III. イエニセイ川のテュルク-ルーン文字記念物の解説 (str. 14~47.)。
- IV. 参考資料 (str. 48~52.)。
- V. 索引 (str. 53~57.)。
- VI. アルバム (al'bom. str. 58~126.)。

◁ 内容目次 (str. 127.)。記念物の分布地図 (str. 10.)。

I. 「序文」では、まず、1970年から開始された、本書の準備作業、実地作業(筆写コピー、写真撮影、記念物の新発見・再点検、発見・出土地・所在地の確認など)、研究室作業(筆写コピーにもとづいた、記念物の複元、参考文献目録の蒐集、分布地図の作成、各書記素(allografa. 文字〔記号〕)の字体的研究、従来の研究との比較、その訂正など)の過程が、写真(2葉)を付して、くわしく語られ、ついで、「ルーン文字の翻字(transliteracionnaja peredača)の特殊性」と題する節がもうけられ、そのなかで、ルーン文字からローマ字への翻字に当たって、本書で用いられた方式が、対照表を掲げて、説明されている。

II. 「インデクス」は、イエニセイ川流域のルーン文字記念物(略号: E)

の一覧表で、これは2部からなる。

第1部では、各記念物が、Eの略号と、その発見、または公表の順序をしめす数字とによって、E1からE145まで列挙され、それぞれのあとに、その発見地による名称、従来の名称、現在の所在地がしめされている。例えば、「E2. ウユク-アルジャン (Ujuk-Aržan) (ウユク-アルハン (Ujuk-Arhan)) (ラドロフ (Radlov) — Uj A) .MM. (国立ミヌシンスク郷土博物館)」、「E53. エリエゲスト (Elegest) III (エリエゲスト川第2記念物) .TM. (トゥーヴァ共和国郷土博物館)」などのごとくである。このうち、E1からE51までは、S. E. Malov, *Enisejskaja pis'mennost' tjurkov*, Moskva-Leningrad, 1952 (略号: *MEPT*) に列挙された順番に、E52からE85までは、V.M.Nadeljaev, D.M.Nasilov, Ė.R.Tenišev, A.M.Ščerbak (red.), *Drevnetjurkskij slovar'*, Leningrad, 1969. の一覧表の順番に、そして、E86からあとは、ほぼ、D.D.Vasil'ev, "Pamjatniki tjurkskoj runičeskoj pis'mennosti aziatskogo areala," *ST*, 1976, No. 1 (str. 71~81.) の順番にしたがっている。本書に収録されたイェニセイ川流域の記念物の総数は144であるが、一覧表でE145まで数えられているのは、モンゴル高原発見の「スージ (Sudži) 記念物」が、E47としてふくまれているからである。

「インデクス」の第2部では、各記念物が、その発見・公表の順序とは無関係に、発見・出土地ごとに分類してしめされ、それらの分布地図が付されている。例えば、「オットウク-ダシ (Ottuk-Daš) 付近発見の記念物」として、E4, E64, E54があげられているがごとくである。

III. 「イェニセイ川のテュルク-ルーン文字記念物の解説」では、各記念物が発見・出土地ごとにまとめられ、それぞれについて、ほぼ下記の項目からなる解説がほどこされている。

1) 石質・形状・大きさそのほか、2) 発見者、発見された年・場所、そのときの状況、3) 現在の所在地、4) 行または書記素 (2点, 3点, または, a, ā をしめす書記素による分離記号をもふくむ) の数、銘文の構図・外形、銘文とともに刻まれている絵画など、5) テキストの残存状況、欠語・欠文、6) 銘文の古文字学的・正字法的特殊性、7) 銘文の構成要素に関する訂正・補足、従来の諸説との相違点、8) テキストの翻字、そして、9) 基本的参考文献。

上述の7)で、「従来の諸説」というのは、とくに *MEPT* で提唱された見解、およびそれ以後に発表された意見をさすが、銘文の新しく行われたコピーと、以前に公表されたものとの比較の結果、例えば、マーロフによって公刊された52個のうち、訂正を要しなかったのは、わずか19個にすぎないことが明らかになったという。

IV. 「参考資料」では、各記念物の、ミヌシンスク・トゥーヴァ両博物館における現状、配置・展示状況が、線画と写真とでしめされ、また、相当数の記念物に付されたタムガのコピーが掲げられている。

V. 「索引」は、「諸記念物の探索・発見・野外調査、および、それらの、博物館コレクションへの移管に参加した人たちの人名索引（簡単な注釈つき）」、「テキストを公刊し、記念物を翻訳した人たちの著者名索引」、および、「略称・略号索引」からなる。

VI. 「アルバム」には、すべての銘文の筆写コピー（str. 59～81.）と、総数144個の記念物のうち、「撮影することのできた」109個の写真とがおさめられている。

以上が、本書の内容の大略であり、すべての章・節・項目が貴重な情報をふくむが、我々にとってとりわけ重要なのは、記念物の写真と銘文の筆写コピーとである。というのは、従来、我々は、イェニセイ川流域の記念物について、ほんのわずかの写真と筆写コピーとしか知らされていなかったからである。例えば、イェニセイ川流域の記念物の、最初の総合的研究は、トルコ共和国の H.N. オルクン(H.N.Orkun)によって、その *Eski Türk Yazıtları*, III. cilt (İstanbul, 1940) (略号: *ETY*) において行われたと⁽²⁾いってよいが、そのなかにおさめられた写真で、銘文がいささかでも認められるのは、60葉前後（1個の碑文で、数葉をふくむ）にすぎず、しかも、その多くが部分的であるうえにきわめて不鮮明であり、筆写コピーにいたっては、わずか6葉である。イェニセイ川流域の記念物の、*ETY* につぐ総合的研究業績は、*MEPT* であるが、これにも、22葉の写真しか掲載されていない。これにたいして、*KER* においては、従来公刊されたものよりはるかに多くの、しかも鮮明な写真と、あらゆる銘文の筆写コピーとが見られる点で、本書の出版がもつ意義はすこぶる大きいといわねばならぬ。

前述のように、著者ワシリエフは、「解説」の章で、各銘文の翻字のみを行い、転写 (*transkripcija*) と翻訳とは読者にまかせている。翻字に母音を加えること (*vokalizacija*) によって転写すること自体、それに著者の「解釈」をふくむ以上、ワシリエフが、翻字だけでとどめたのは、それなりに評価できる。

しかし、ワシリエフが本書でしめしている翻字をそのまま採用するのは危険な場合がある。誤植、または、不注意からする脱落と思われる例、および、明らかな誤読が見られるからである。すべてについて検討したわけではないが、評者の気づいたものを4例だけあげておく。

まず、誤植、あるいは、不注意にもとづく脱落と思われる1例として下記のものがある。

E 11銘文 (ベグレ [Begre] 銘文) の第 3 行の最初の部分は、KER 所掲の写真 (str. 92.)、および、筆写コピー (str. 61.) からは、評者が本稿でとる方式によると、つぎのように翻字できる。

skizDQLGBRmGüčnaYiLQitüktiBRDma

ところが、ワシリエフは、冒頭から第12番目の書記素Gを翻字していない (str. 20.)。このGは、ETY (s. 75, 72.)、および、MEPT (str. 30.) におさめられた写真、活字コピーにもはっきり認められるのみならず、ワシリエフが、冒頭から第8番目のG、ならびに、上に引用した部分のあとに見えるGは、これらを翻字している点からみると、第12番目のGが翻字されていないのは、誤植か、さもなくば、脱落であろう。オルクン、マーロフ、A.v. ガベン (A. von Gabain) は、上句中のBRmGüčnをbarimīy üčünと転写しているが、⁽⁵⁾評者は、これを、barim ayī üčünと写したいと思う。この問題に関しては、べつに論じたので、ここでのべるのはさしひかえる。

つぎに、明らかな誤読の1例として、つぎのものがあげられる。

E 41銘文 (ヘムチク・チュルガクィ [Hemčik-Čyrgaky] 銘文) の第9行の最後の部分は、評者によると、下記のごとく翻字される。

GmGa : l̄tmsTbntm

ワシリエフは、末尾から第4番目、評者がbと翻字した書記素をmと写しているが (str. 29.)、これは、KER 所掲の写真 (str. 106.)、筆写コピー (str. 67.) では、明らかにbである。ETY におさめられた写真 (s. 85.)、活字コピー (s. 80.) からも、MEPT の活字コピー (str. 74.) からも、bと翻字されねばならぬことは明白である。この1句は、

ayīmya altmīš at bintim

と転写されるであろう。

さらに、KER を利用するに当たって注意されねばならぬことは、本書の叙述、いまの場合にそくしていえば翻字が、あくまでも、「現在の」記念物の状態にもとづいている点である。つまり、長年にわたる風化、ないしは、後人の彫りこみその他によって、記念物の現状が、その本来の形状のままであるとは、必ずしもいえないのである。

例えば、E 46銘文 (テレエ [Telée] 銘文) の第3行の最後の箇所は、KER に掲載された写真 (str. 109.) からは、

türtbη (? U) <…> L <…> Qm <…>

と翻字できる。ワシリエフは、これを、

türtbU (TLmYL)Qm

と、欠字を補って翻字している (str. 32.)。彼がLを () の中へいれてい

るのは、写真では明らかに見えるこの書記素を認めなかったからであろう。ところが、*MEPT* 所収の活字コピー (str. 83.) によると、

türtbU(?η)TL(Rm)YLQm

という翻字が可能である。評者は、この方が古い形状をのこしている、つまり、元来、明白であったT, YLが、風化などのため、今日では、すでに見られなくなったのであると考える。そして、冒頭から第6番目の書記素は、Uのように読めなくもないが、その左上の斜線を少しのばすとηと翻字できる。したがって、評者は、上の語句を、*MEPT* におけると同じく、

tört biğ atlarım yilgim

と転写したいと思う。ワシリエフは、上にしめしたように、欠字をTLmYLと補っているが、これは、記念物の現状によれば、(T)L(RmYL)と、Rをも補足すべきである。

さらに、E42銘文(バイ-ブルン〔Baj-Bulun〕第1銘文)⁽⁹⁾の第6行の中央部は、*KER*の写真(str. 107.)、筆写コピー(str. 68.)によると、

bz : sKzDQ : LiG : Bzmm

と翻字できる。しかし、この1句は、*ETY* (s. 96.)、*MEPT* (str. 77.) 所掲の活字コピーからは、

bη : sKzDQ : LiG : BRmm

という翻字が可能である。*KER*におさめられた写真では、Bzmm, skzのzは鮮明であるが、bzのzの形は、それらの形とは違っていて、その右下への斜線をとってみると、これをηと読んで読めぬことはない。評者は、前後の文脈から考慮して、*ETY*、*MEPT*に掲載された活字コピーが古い形状をのこしていると考え、上の語句を、

biğ säkiz adaqlıy barımım

と転写するものである。

以上、ただ4例をあげて、*KER*に見出される、誤植、ないし、不注意からする脱落、明らかな誤読、および、風化、または、後人の彫りこみそのほかによる記念物の変化についてのべたが、こうした例は、仔細に検討すれば、ほかにも指摘できるのである。

*KER*を利用するさいには、以上のごとき点に注意する必要がある。

しかし、このことは、本書の価値を減じるものではない。本書には、まえにも触れたように、イエニセイ川流域の記念物のうち、今日、発見されているものすべて、144個の筆写コピー、および、それらのうち、109個の、従来公刊されたものに比してはるかに鮮明な写真がおさめられているからである。

このほか、本書の各章、および、各節、各項目、各記念物の解説のあと

には、詳細な参考文献目録が付されている。これらのなかには、我国では参看しえぬものも少なくないが、この文献目録も、我々に裨益するところが多い。

今後、イェニセイ川流域の記念物、とくに墓碑銘文の研究を志すものにとって、本書は、これにさきだつて、同じ著者が公刊した、より包括的な、*Grafičeskij fond pamjatnikov tjurkskoj runičeskoj pis'mennosti aziatskogo areala*, Moskva, 1983. とともに、欠くべからざる座右の書というべきである。

(D.D. Vasil'ev, *Korpus tjurkskih runičeskikh pamjatnikov bassejna Eniseja* (pod obščej redakciej akademika A.N. Kononova. Otvetsvennyj redaktor : S.G. Kljaštornyj, Recenzenty : И.Г. Dobrodomov, Е.Р. Tenišev), Leningrad, 1983, 127 str. 22.5×29.5 cm.)

註

- (1) 本書では、キリル文字からローマ字への翻字に当たつて、国際規格 ISO/R 9方式によつた。
- (2) オルクンは、合計23個について研究している。
- (3) 以下、本稿でしめす行数は、KERにおけるそれである。
- (4) 評者は、本稿では、印刷事情を考慮して、下記のごとき翻字方式をとつた。
 - i) いわゆる「男性語」(軟口蓋音をふくむ語)で用いられる書記素は大文字でしめす。Uはo, uをあらわす。γをしめすには大文字のガンマを使うべきであるが、便宜上、これをGで翻字した。
 - ii) いわゆる「女性語」(硬口蓋音をふくむ語)で用いられる書記素は小文字でしめす。
 - iii) 「男性語」・「女性語」の双方に用いられる書記素には下線をひく。aはa, äを、iはI, i, eを、それぞれあらわす。また、sとšとをしめす書記素のあいだに書体的区別はなく、さらに、このs/šは「男性語」にも「女性語」にも使われるから、これは、ともにsでしめす。
 - iv) 1つの書記素で、2つの音素をあらわす場合には、2つのローマ字の下に~を付ける。
- (5) *ETY*, s. 72. *MEPT*, str. 30. A. von Gabain, *Alttürkische Grammatik*, 3. Aufl., Wiesbaden, 1974, S. 142.
- (6) 護雅夫「イェニセイ碑文に見える“säkiz adaqlıy barım”について」『日本大学人文科学研究所「研究紀要」』(近刊)。
- (7) 従来は、ケムチク-ジルガク (Kemčik-Džirgak) 川銘文と呼ばれてい

た。

- (8) 従来は、テリュエ (Tële) 川銘文と呼ばれていた。
 (9) 従来は、ミヌシンスク博物館の銘文と呼ばれていた。

愛新覚羅・烏拉熙春編著

満語語法 (manju gisuni gisun turu)

久保 智之

編著者である愛新覚羅・烏拉熙春（以後著者とする）は、現在、中国遼寧省民族事務委員会に在職しており、本書の校訂者である満洲語・女真語学者金啓琮氏の令嬢である⁽¹⁾。父君と共同で満洲語文語のombiについての論文がある⁽²⁾。

前言には、多くの満族同志の、満洲語を学習したい、理解したいという要求に応じて『満語語法』と『満語会話』を編纂し、ここに前者を出版する……（中略）……大多数の満族が話しているのは漢語であるから、漢語を通じて学習するという観点から書いた、とある。前言の内容に関して指摘しておくべき本書の欠点は、例文の大部分を満文檔案や奏摺、満漢合璧の古典作品から引いたとあるが、典拠が全く示されていないことである。満洲語という言葉が17世紀から現代に至るまで（現代の文語らしき例文もある）文法体系に何の変化もなく、すべての資料が単一の文法の反映であると考えているなら、それでよいのかもしれないが、例えばIkegami⁽³⁾が指摘しているように、助詞 (ci と deri) の用法ひとつとっても、時代による差異が明確に認められるのである。もちろん変化のない用法も多々あるであろう。しかし、作業仮説としては、資料によって文法が違うとしておくべきであり、文典という性質上、広範な例が必要で、単一の資料だけからの引用が無理であるとしても、最低限出典は明示すべきである。評者の見たところ、『満文老檔』『清文虚字指南編』『宮中檔康熙朝奏摺』『清文指要』、さらに、現在中国の新疆ウイグル自治区で話されているシボ語の文語かと思われるもの、などからの引用が多いようである。

次に目次を掲げる。

『満語語法』序 (p.1) (孫英年氏による)

前言 (p.1)

満文字母表 (p.1)